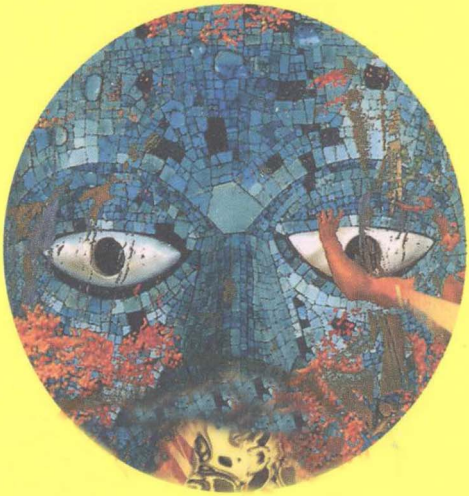
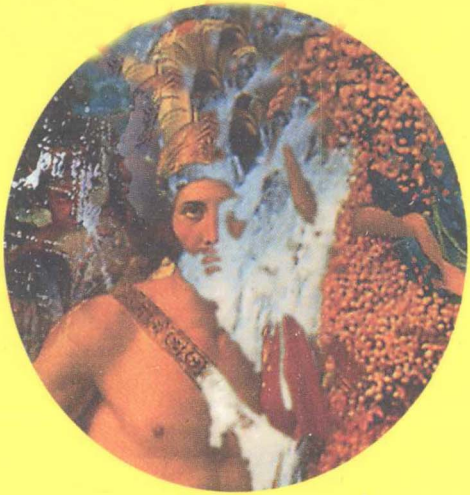
BIRTHDAY
バースデイ

KOJI SUZUKI
鈴木光司

バースデイ





KOJI SUZUKI

鈴木光司

バースデイ

平成十一年二月五日　初版発行

著　者——鈴木光司
発行者——角川歴彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三
〒102-8177　振替　00130-9-95208
電話／営業部〇三-三二三八-八五二一
編集部〇三-三二三八-八四五一

印刷所——旭印刷株式会社
製本所——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本は小社営業部サービスセンター宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Koji Suzuki 1998
1999 Printed in Japan
ISBN4-04-873151-3 C0093

¥1400

バースデイ

装丁　横尾忠則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

空に浮かぶ棺　5
レモンハート　51
ハッピー・バースデイ　171

空に浮かぶ棺

1

一九九〇年　十一月

意識がはっきりする以前から、彼女の網膜はぼんやりと上空の風景をとらえていた。風景といっても視界はごく狭く、地の底に横たわって、長方形に切り取られた空を見上げているようなものだ。縦に走る青い空の線以外は、すべて黒で縁取られている。最初のうち、彼女には、眺めている風景の意味がわからなかった。今いる場所がどこなのか、見当もつかない。

眠りから覚め、夢とうつつとの境が朦朧（もうろう）としているときの感覚と同じだった。

左右にはコンクリートの壁が迫り、背中の下にも同質の硬い感触がある。丸い空が上にあるのなら、井戸の底ともとれるのだが、形状から察すれば、どうも数メートルの深さを

持つ直方体の亀裂であると思われてくる。

日の光を直接見ることはできなかった。冷え冷えとして、澄んだ空気の肌触りから、まだ早朝であるような気がする。ときどき、異様な迫力を持って、間近からカラスの鳴き声が聞こえてきた。姿も見せず、羽ばたきもなく、鳴き声だけがガーガーと狭い空間に響き渡る。

忽然とカラスの声が消えたかと思うと、船の汽笛がそれに代わって、耳に流れ込んだ。海が近いに違いない。潮の香りがわずかに鼻孔を刺激してくる。東京湾に面したビルの屋上……、彼女は、次第に今自分のいる場所を把握していった。

顎を上に突き出すと、錆びたパイプが二本、頭の上を横切っているのが見える。両側から壁は迫り、肩や腕を動かすスペースすらない。ひび割れたコンクリートから鉄筋が数本、刺のように飛び出していた。触れると痛そうな刺の先端が、ただでさえ狭い空間をより狭く感じさせている。あお向けのまま、両手両足をまっすぐに伸ばした一本の棒のような姿勢で、横たわる他なさそうだ。

身体を固定したまま首を起こし、視線を足下のほうにずらしてみる。目の錯覚なのか、さっきまで細い鉄の筋と思われたものが、吹き込む風に揺れているように見えたからだ。じっと目を凝らすと、鉄の筋ではなく、浴衣の帯に似た細い布製の紐であることがわかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。一方の端がどこに結わえられているかは見えない。だが、片方の端は、足のあたりをふわふわとさまよっている。

……蜘蛛の糸。

『蜘蛛の糸』という小説のタイトルを思い浮かべた瞬間、地獄を連想し、身体中の毛穴がきゅっとひき締まる感覚を得た。

自分がなぜ今こんなところにいるのか、思い出すことができなかった。打ち捨てられたタイルのように、記憶はとぎれとぎれに拡散している。思い出そうと努力しても、断片は意味のある模様を形成することなく、物事の因果関係がわからなくなっている。

……ここはどこなのか。なぜ、自分はここにいるのか。

記憶が部分的に抜け落ちているのは明らかだが、空白部分がどれほど多いのか見当もつかない。

彼女は自分の名前を胸の内でつぶやいてみる。

……高野舞。

間違ってはいないと思う。自分が高野舞という名前を持つ女性なのは確からしい。だが、どうも違和感があるのだ。異物が身体に入り込んだ感覚を拭い切れず、さっきから自分が自分でないような気分を味わっていた。

続いて、年齢や住所、これまでの経歴など、自分の輪郭をはっきりさせる情報を、思い出せる限り胸の内で確認してみる。

……二十二歳、大学生。文学部に籍を置き、この先の進路は大学院の哲学専攻と決まっている。

突如、足の痛みに襲われた。というより、目覚めて初めて、足首あたりが痛むのを感知したのだ。

高野舞はおそるおそる顔を上げて、自分の足下のほうを見ようとする。唖然とした。足が見えないのだ。

視界を遮る物の正体がわからず、初めのうち目を細めたりしていたが、やがて、それが自分の膨らんだ腹と知れると、高野舞は両目を見開いて驚愕の表情を浮かべた。

トレーナーをたくし込んだジャンパースカートの腹部が、パンパンに膨らんでいる。高野舞は、足の痛みも忘れ、突き出た腹にそっと手を置いてみた。異物が腹の中に差し挟まれているのではなく、腹と、そこに触れている手が、皮膚として連続しているという確かな感覚があった。腹の皮を突っ張らせて、肉体の内部から盛り上がっているのである。記憶し得る限り、それまでの自分はスリムな体型であったはずだ。胸もそう大きなほうではなく、ウェストに至っては女性の平均以下の細さを誇っていた。

恐怖もなければ、失望もなかった。驚きが去った後、しばし呆然として、高野舞は両方の手で自分の腹をさすり続けた。自分の置かれた状況が信じられず、どんな感情を持てばいいのかさえわからないでいる。

客観的な、冷静な視線が、自分の身体を眺め回している。思考力が停止してしまったように、心の内は真っ白だ。他人事の視線によってしげしげと観察される膨らんだ腹。どこから見ても、臨月の腹だ。妊婦という言葉が浮かんだ。

それをきっかけとして、高野舞の脳裏に次々と、断片的な映像が蘇る。なぜ、自分が今ここにいるのか、直感で理解したようだ。発端は、そう一本のビデオテープだった。

……見てしまったからだ。

嫌な予感がしたにもかかわらず、見てしまったのがいけない。

高野舞は今、ビデオデッキにテープをセットし、プレイボタンを押したときの指の感触までリアルに、思い起こしていた。

2

ビデオテープを手に入れてしまったのも、映像を見てしまったのも、単なるなりゆきか

らだった。偶然と見える裏で、人為的な力が働いたのかどうか、高野舞には知りようがなかった。目に見えない力に怯えるあまり、必死で、単なる偶然だと思い込もうとしていたようだ。真実を知ることすら避けたかったのかもしれない。

高山竜司の死に一本のビデオテープが絡んでいるらしいという話は、竜司の友人である浅川から、それとなく聞いていた。しかし、具体的にどう関わっていたのかはだれも教えてくれなかった。思いも寄らない映像を見たせいで、ショック死を起こしたという、荒唐無稽な仮説をたてたのは舞自身だった。人を死に導くビデオテープのからくりを、それ以外にどうやって説明しろというのか……。

でなければ、浅川の言った言葉が理解できない。高山竜司の死の瞬間に立ち会った舞に対して、彼はこう尋ねたのだった。

「本当に、竜司はあなたになにも言い残してないのですね？　たとえば、ビデオテープのこととか……」

いかにも、ビデオテープが高山の死をもたらしたという口振りであった。

結局、舞は信じていなかった。だからこそ、ふらふらと導かれるようにして、映像を見てしまったのである。

大学で論理学を教える高山竜司は、月刊誌に哲学論文を連載していて、その清書をして

いたのが、教え子の舞である。竜司の悪筆は、よほど読み慣れた者にしか解読不可能で、舞は、犠牲的精神というより、師の論文を最初に読む光栄に浴したいという思惑から、自ら清書役を買って出たのであった。

ところが、連載の最終回を書き終わったところで、高山竜司は急逝してしまう。遺体を解剖した監察医、安藤満男の見立てによれば、心臓を取り巻く冠動脈の閉塞によって、急性心筋梗塞を起こしたらしいというのだが、疑問点は多い。竜司の友人の浅川に至っては、ビデオテープを見たことが直接の原因であるらしいと、意味不明なことを仄めかす始末。竜司の死を取り沙汰する環境はますます混迷化するばかりだった。

原稿の最終回を担当編集者に渡す直前になって、舞は、原稿に落丁があるのを発見した。一年に及ぶ連載の最後の結論部分が、数枚欠けていたのである。

竜司の部屋をしらみつぶしに探したが見つからず、最後の望みをかけたのは、相模大野にある竜司の実家であった。死の直後、竜司の部屋にあった荷物はすべて、実家に運び込まれている。落丁分の原稿がある場所として、ほかには考えられなかった。

竜司の母に事の次第を説明し、了解を得て家に迎えられた舞は、二階の個室に通された。小学校から大学二年まで、竜司が勉強部屋として使っていた部屋である。舞は、この部屋の中を自由に探す権限を与えられた。

書籍類から衣類、電気製品、小さな家具と、１ＤＫのアパートにあった家財道具はすべて、段ボールに詰め込まれ、乱雑に積み上げられている。捜し物はほんの数枚の原稿用紙に過ぎず、隠れ場所はかくも多い。長丁場を予想し、舞はカーディガンを脱いで仕事に取り掛かったのだった。

捜し始めてしばらくするうち、たった数枚の原稿を探すことが、果てしもなく不毛な行為であることを悟っていった。だからといって、落丁分の原稿をどう埋め合わせるべきか解決策が浮かばず、ただだらだらと捜し続けるほかなかったのだが……。

萎えていく気力を象徴するかのように、舞の背中は疲れを帯びて曲がり、その丸くなった背中に集中する視線を、ふとした折に感じるようになっていった。何かに見られているという感覚はますます強くなる。

高校生の頃、担任の美術教師に請われて、舞はたった一度だけ油絵のモデルをしたことがある。むろん着衣でのモデルであったが、教師の視線は服を通過して肌を舐め、肉の奥の骨格にまで達するかのようで、恥ずかしさと陶酔の入り交じった、一種異様な興奮を味わったものだ。人物の頭を描くとき、画家の目は頭蓋骨の形状を観察しているということを後で聞き、舞は、自分の直感が正しかったことを知った。

……美術教師の目は、わたしの骨盤をはっきりととらえていたんだわ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com